

**製品名: CP250 ウサギポリクローナル抗体**

**カタログ番号: APRab09293**

研究使用のみ

## 概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	IHC, ICC/IF
反応性	ヒト、ラット、マウス
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

## 応用

希釈倍率	IHC 1:50-1:300, ICC/IF 1:50-1:200
分子量	268kDa

## 抗原情報

遺伝子名	CEP250
別名	CEP2 CNAP1
遺伝子 ID	11190.0
SwissProt ID	Q9BV73
免疫原	ヒトタンパク質の一部領域から得られた合成ペプチド

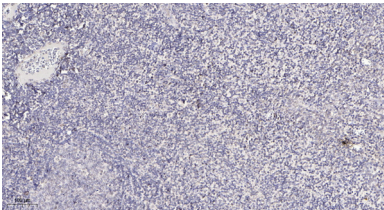
## 背景

中心体タンパク質 250 (CEP250) ホモサピエンス この遺伝子は、細胞周期の間期における中心小体間の接着に必要な、中心体のコアタンパク質をコードしています。コードされているタンパク質は、有糸分裂の開始時に親の中心小体が分離する際に中心体から解離

します。このタンパク質は、同じく中心体に関連する NIMA 関連キナーゼ 2 と会合し、リン酸化されます。選択的スプライシングにより、異なるアイソフォームをコードする複数の転写バリエーションが生成されます。[RefSeq 提供、2015 年 12 月]、疾患：中心体タンパク質に対する自己抗体を発現した自己免疫疾患患者の血清には、CEP2 に対する抗体が存在します。機能：間期における中心体接着に重要な役割を果たしていると考えられます。PTM：細胞周期中に異なるリン酸化を受けます。リン酸化は中心体への結合/解離を制御する可能性がある。有糸分裂の M 期には、C 末端部分が NEK2 によってリン酸化されることから、有糸分裂中心体からの解離を引き起こす可能性が示唆される。in vitro では PP1 ホスファターゼによって脱リン酸化される。細胞内局在：コア中心体の構成要素。間期細胞では、母細胞と娘細胞の中心小体の近位端に特異的に結合する。間期細胞では中心体に結合する。有糸分裂細胞では、有糸分裂紡錘体の極から解離する。細胞分裂の終了時に、中心体に再蓄積する。光受容体では、基底小体の近位端に見られる。サブユニット：単量体およびホモ二量体（おそらく）。CROCC/ルートレチンと相互作用する（類似性による）。NEK2 キナーゼおよびタンパク質ホスファターゼ 1 (PP1) の PPP1CC 触媒サブユニットの両方と in vitro 複合体を形成する。組織特異性：普遍的に弱く発現する。

## 研究分野

## 画像データ



パラフィン包埋ヒト扁桃腺の免疫組織化学分析。1、抗体を 1:200 に希釈した（4°Cで一晩）。2、抗原賦活化には Tris-EDTA、pH9.0 を使用した。3、二次抗体を 1:200 に希釈した（室温、30 分）。